

ニュージーランド(NZ)の移入種対策 - 普及啓発施策 -

NZの移入種対策にとって、普及啓発は重要な課題であり、Biosecurity(生物安全保障)に関わる、農林省(Ministry of Agriculture and Forestry: MAF)、自然保護庁(Department of Conservation: DoC)、地域議会(Regional Councils)が中心的に、様々な普及活動を実施している。これらの活動は、大きく区分けて次の3タイプに区分できる:(1) Biosecurityの理念、一般情報の普及啓発、(2) 侵略的移入種の監視に対する普及啓発、(3) 駆除、防除に関する技術、留意点などの普及啓発。

(1) Biosecurityの理念、一般情報の普及啓発

代表例は、政府による定期刊行物の発行、メーリングリスト運営、パンフレット、ポスター類の配布である。MAFは、Biosecurityに関する定期刊行物(通常年間に8刊)を官庁、図書館などに配布し、Webでも閲覧できるようにして、その理念を広く一般に普及している。また【図-1】の、ウェリントン地区議会発行の移入種問題に関するニュースレターでは、フロントページで、8.6kmの防御フェンス内でのフクロギツネの駆除が成功し、そこにキウィーを再導入する試みが紹介されている。このような配布資料は、行政、NGOなどにより、多数作成され、広く一般に無料配布されている。



【図-1】

(2) 侵略的移入種の監視に対する普及啓発

MAF、DoCでは、主に市民によるSurveillance(監視)を重点課題とし、移入種の早期発見と情報収集を普及啓発の軸としている。【別紙 Exotic Pest Information Sheet】はオーストラリア、パプアニューギニア原産のツチバチが、2000年にNZ国内の数カ所で確認された事例を紹介している。このハチによる生態系による影響(特に固有甲虫類への寄生)の危険性を説明している。また、MAFとDoCが情報、ならびにサンプルの収集を呼びかけ、収集したサンプルを回収している組織を列挙している。このような生物多様性保全を軸とした移入種問題の普及啓発はNZ国内では、非常に盛んである。同様なパンフレットを侵略的、移入種(特に過去に、NZに侵入した事例のあるアカヒアリ、オオヒキガエル、マイマイガなど)について、監視体制強化を促進する目的で作成している。これらに関しては、種の分別、発見時の連絡先、留意点などを記載し、主要な侵入経路と考えられる空港、港周辺に特に重点的に多く配布している。結果、実際に多くの移入種が、これらパンフレットを閲覧した市民により発見されている。また、地域の生態系保全のために、国立公園、島嶼生態などの特定の地域に限った同様の市民参加型の早期監視プログラムは、特に侵略的な移入植物種で、その事例は多い。

(3) 駆除、防除に関する技術、留意点の普及啓発

駆除の必要性を説明する政府刊行物の発行数は非常に多い。フクロギツネによる環境への悪影響を表示したパンフレットなどは、学校などでも配布されている。また、移入種駆除に用いる毒薬の使用についての留意点を明記した資料や、子供に毒薬に触れないよう注意を呼びかけるポスターなどを作成している。駆除については、通常ではRegional Councils(地域議会)にて普及啓発されることが多い。これは、Biosecurity法により、地域議会に「地域有害駆除計画」の策定を定めており、その中に、駆除、防除、管理に関する適切な助言を市民に与えるように義務づけているからである。【別紙 Possums】は、ウェリントン地域での「地域有害駆除計画」の一資料である。フクロギツネが、ラタなどの固有森林生態系を破壊し、農林、園芸を食害し、牛結核の媒介をするなどの問題(Problem)を列挙し、その駆除(管理)手法(Control Method)として、Timms trap(ククリワナ的一种)を推進している。また、ワナの設置場所、誘因エサ、死体の破棄方法なども説明しており、ワナを地域議会から購入可能であることも紹介している。